

十勝岳の火山活動解説資料（令和5年1月）

札幌管区気象台
地域火山監視・警報センター

62-2 火口、振子沢噴気孔群及びその周辺では熱活動の活発な状態が続いており、今後の火山活動の推移には注意が必要です。

噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）の予報事項に変更はありません。

○活動概況

・噴煙など表面現象の状況（図1-①～⑤、図2-①～③、図3）

監視カメラによる観測では、62-2火口の噴煙は2021年頃から高い状態が続いており、今期間の噴煙の高さは火口縁上600m以下で経過しました。大正火口及び振子沢噴気孔群の噴気の高さは200m以下で経過しました。振子沢噴気孔群の噴気は2018年頃からやや高い状態が続いています。また、前十勝の北西側斜面で、時々弱い噴気を確認しました。

・地震及び微動の発生状況（図1-⑥～⑨、図2-④～⑥、図4）

火山性地震はやや少ない状態で経過し、主に62-2火口付近のごく浅い所、旧噴火口付近のごく浅い所～深さ1km付近及びグラウンド火口付近の深さ0kmで発生しました。

火山性微動は観測されていません。

・地殻変動の状況（図2-⑦、図5）

62-2火口近傍に北海道大学が設置した前十勝西の傾斜計では、今期間は微動や地震増加と同期した傾斜変動は観測されていません。

GNSS観測では、2021年頃から山体浅部の収縮を示すと考えられる変動が観測されていましたが、2022年秋以降は概ね停滞しています。なお、山体深部の動きを示すと考えられる地殻変動は観測されていません。

この火山活動解説資料は、気象庁のホームページでも閲覧することができます。

https://www.data.jma.go.jp/vois/data/tokyo/STOCK/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php

本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.data.jma.go.jp/vois/data/tokyo/STOCK/kaisetsu/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土交通省北海道開発局、国土地理院、北海道大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所、北海道及び地方独立行政法人北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図 50mメッシュ（標高）』及び『電子地形図（タイル）』を使用しています。

次回の火山活動解説資料（令和5年2月分）は令和5年3月8日に発表する予定です。

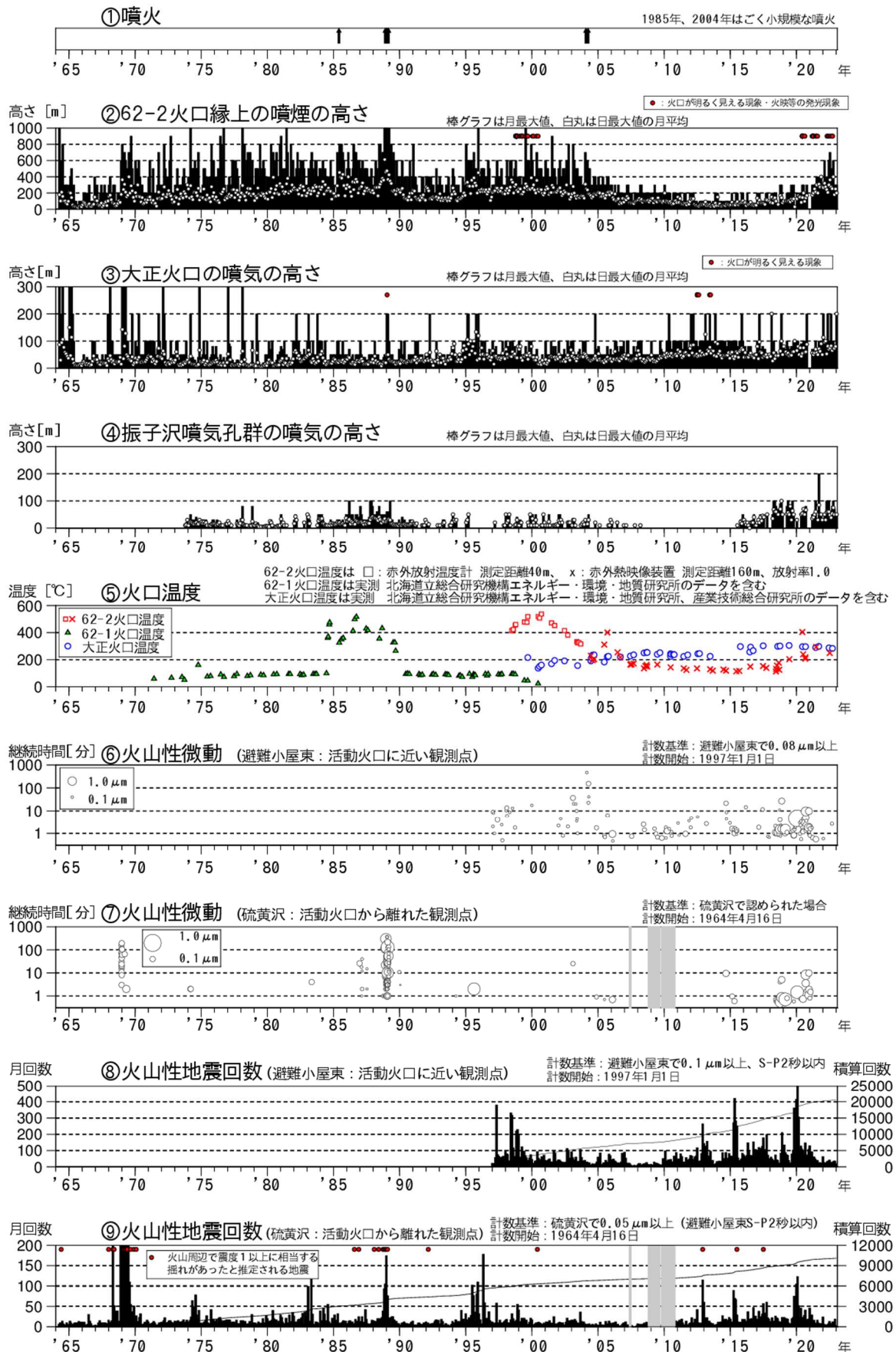


図1 十勝岳 火山活動経過図（1964年1月～2023年1月）

⑦⑨の灰色部分は機器障害による欠測期間を示します。

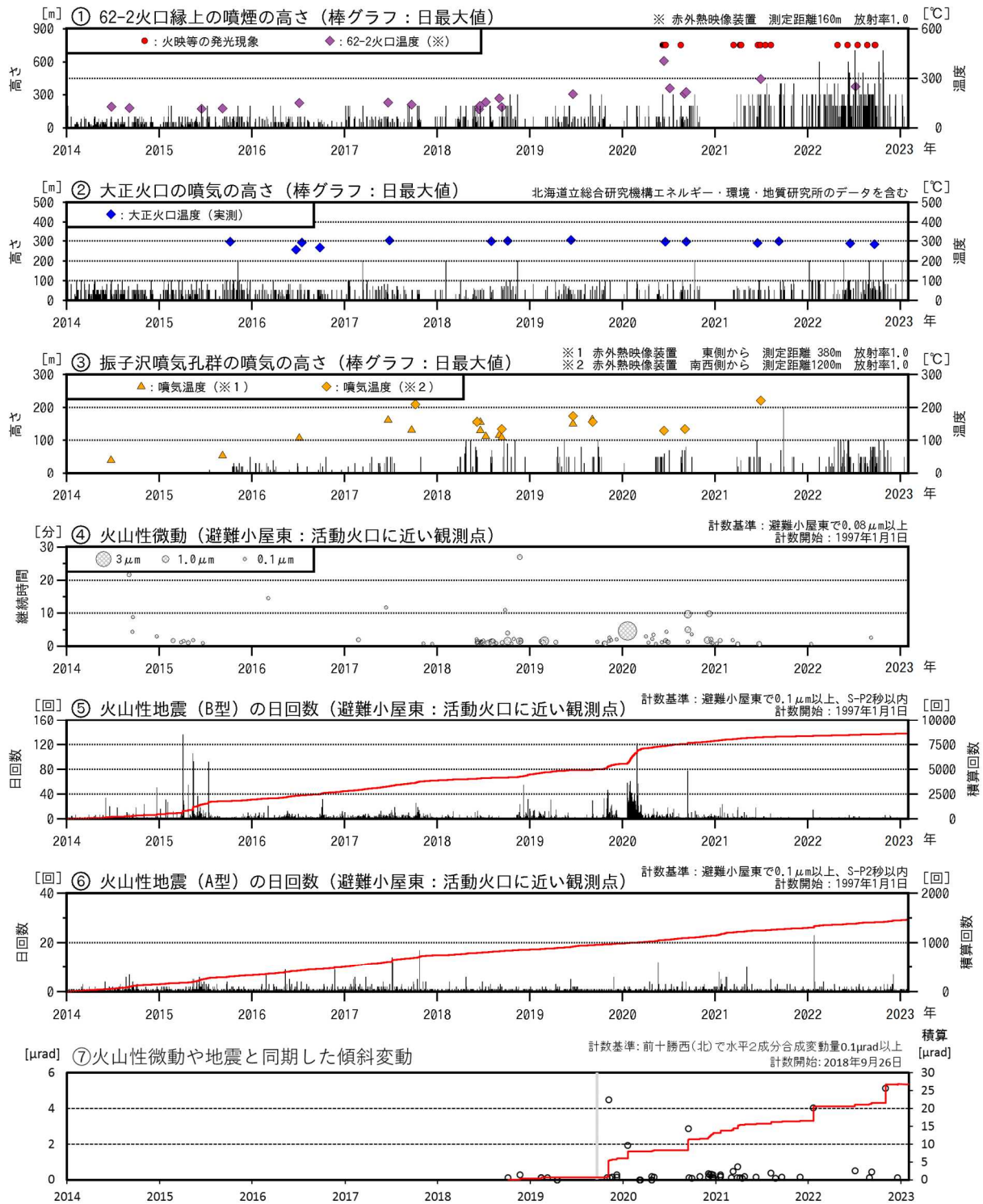


図2 十勝岳 火山活動経過図（2014年1月～2023年1月）

⑤は主に 62-2 火口付近のごく浅い所で発生したと推測されるB型地震の回数を示します。

⑦の灰色部分は機器障害による欠測期間を示します。



図3 十勝岳 北西側から見た火口周辺の状況（白金模範牧場監視カメラによる）及び火口周辺図

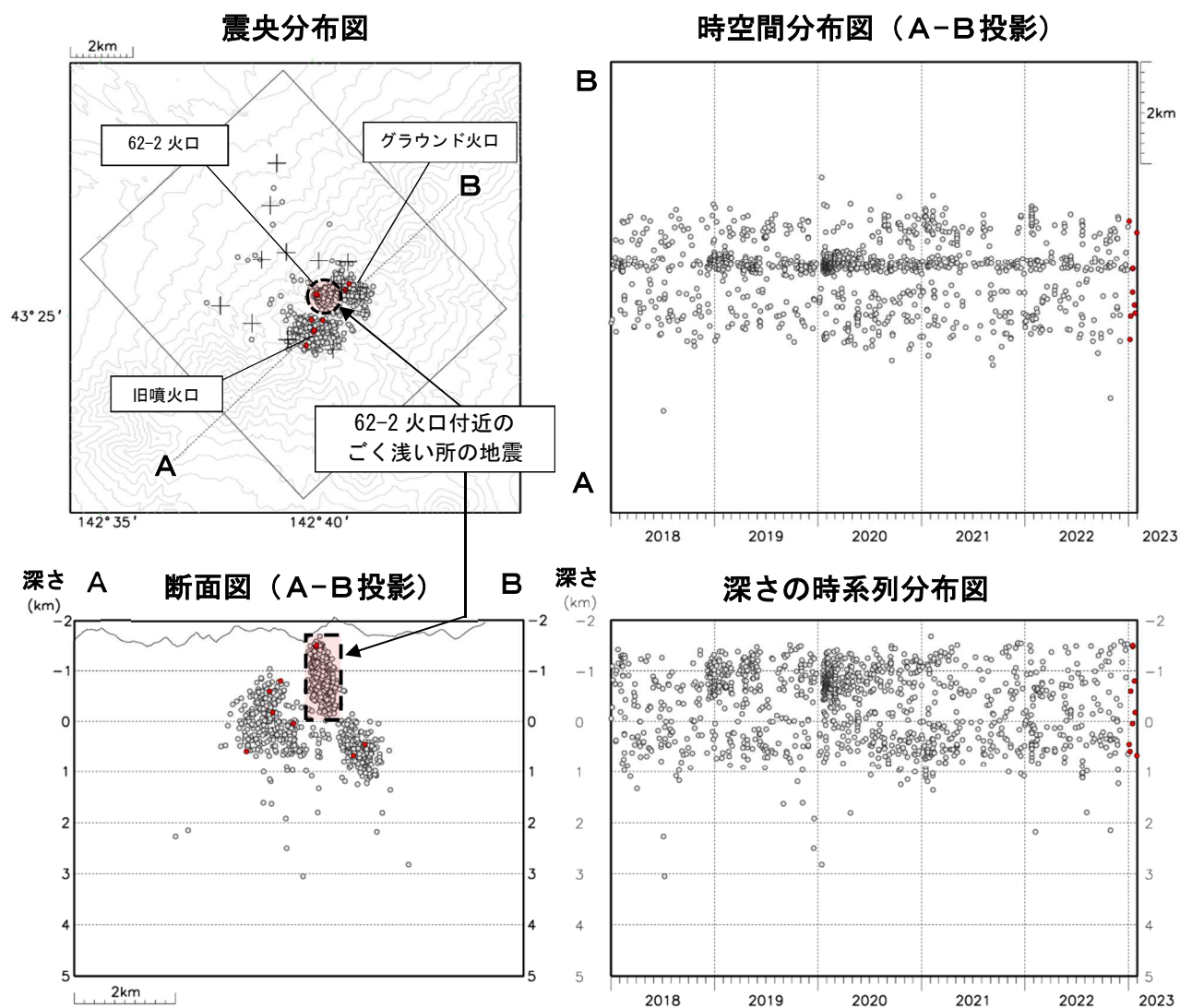


図4 十勝岳 火山性地震の震源分布（2018年1月～2023年1月）
 ●：2018年1月～2022年12月の震源 ●：2023年1月の震源 ＋：地震観測点

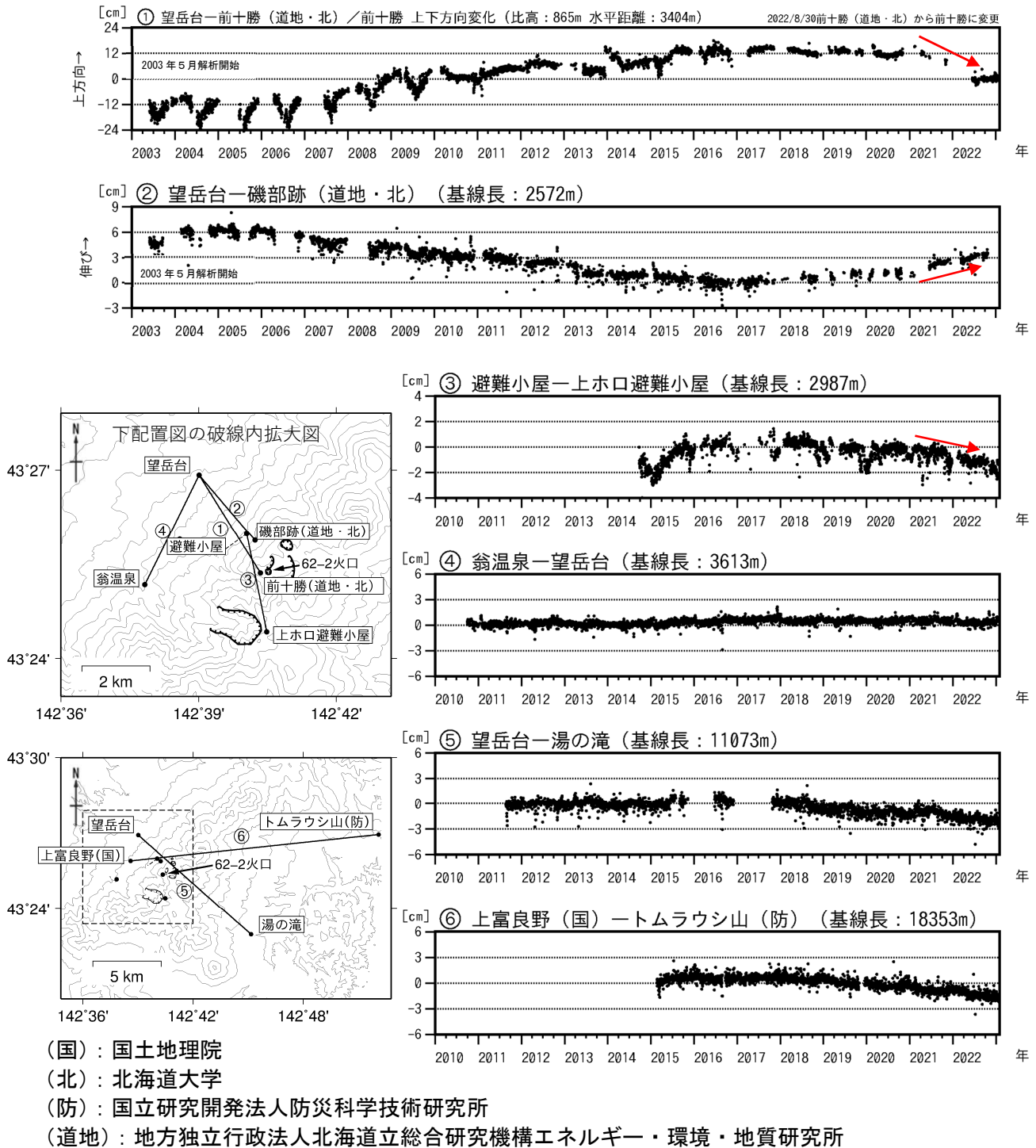


図5 十勝岳 GNSS連続観測による上下方向変化及び基線長変化（2003年5月～2023年1月）及び観測点配置図

グラフ①～⑥は観測点配置図の基線①～⑥に対応しています。

グラフ中の空白部分は欠測を示します。

冬季に凍上や積雪の影響によると考えられる変動がみられる基線があります。

2010年3月の前後で解析方法が異なります。

- ・基線①～③では2021年頃から2022年夏頃にかけて山体浅部の収縮を示すと考えられる基線長の短縮及び観測点の沈降（赤矢印）が観測されていました。

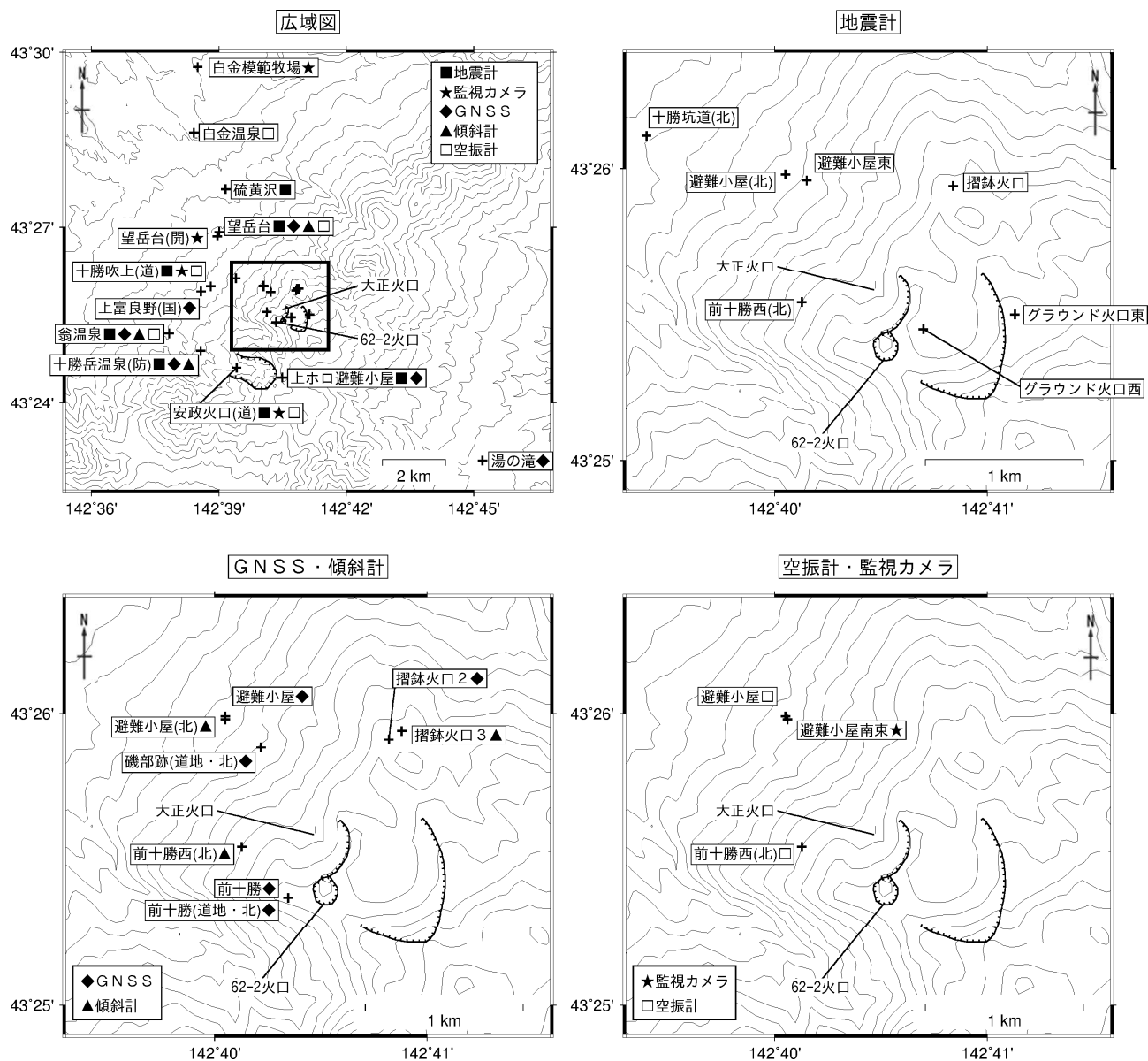


図6 十勝岳 観測点配置図

各機器の配置図は、広域図内の太枠線で示した領域を拡大したものです。

＋印は観測点の位置を示します。

気象庁以外の機関の観測点には以下の記号を付しています。

- (開) : 国土交通省北海道開発局
- (国) : 国土地理院
- (北) : 北海道大学
- (防) : 国立研究開発法人防災科学技術研究所
- (道) : 北海道
- (道地) : 地方独立行政法人北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所